

【親鸞部門・優秀賞】

母の言葉

徳島市立高等学校 第2学年 森本 和佳

高校一年生の一月、私は三学期に入ったにも関わらず、クラスに馴染むことができず思い悩む日々を過ごしていた。学校に行くたび、自分が思うように周りに関わることができず、日に日に学校に行きたくないという気持ちが増していく一方だった。それまで学校や人間関係のことで悩んだことのなかった私にとってその負担は大きく、眠れない日が続き授業やテストにも集中できなくなってしまっていた。

小さい頃からマイペースで人よりもワンテンポ遅れていることが多く、部活動などで同級生や先輩に注意されていることもよくあった。さらに人とは違うものを好むこともあって周りから「変わってるね。」と言われることもあった。私は自分が周りとは違うこと、普通じゃないことが、クラスになじめない原因だと思い込み、気づけば自己嫌悪に陥ってしまっていた。日々の苦しさに堪え切れなくなった私は、そのことを母に相談してみることにした。普段自分が学校で感じていること、抱えていること、私は全てを包み隠さず母に打ち開けた。苦しさを懸命に訴える私の目には涙が溢れていた。そして私は最後に、

「どうしたら普通の子になれる？」

と母に問いかけた。すると母は、

「普通の子なんて一人もおらん。あんたはあんたのままでええんじょ。」

と私に言ってくれた。私はその言葉を受け、今まで抱え込んでいたものがサッと消えていくように感じた。母の言葉は私を私のままでいさせてくれる魔法の言葉だった。

高校二年生になった私は、母にもらった言葉を宝物にし、自分らしさを忘れずに毎日楽しく学校生活を送ることができている。人が生んだ言葉には、相手の心を動かしたり励ましたりして生きる力を与えてくれる。私も母のように誰かの心を動かし、その人にとって一生の宝物になるような言葉を生むことができるような人になりたいと思う。